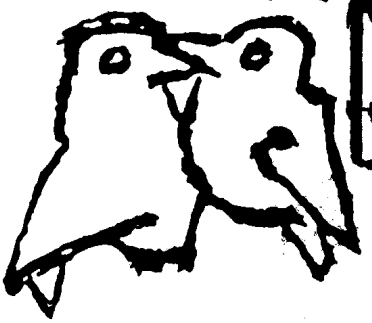
武者小路實篤全集

武者小路实笃全集



浙江工业学院图书馆
藏书章

第九卷

武者小路實篤全集　第九巻

一九八九年四月二〇日　初版第一刷発行

著者——武者小路實篤
発行者——相賀徹夫
発行所——小学館
一〇一—〇一　東京都千代田区一ツ橋二丁目三番一号
振替　東京八—二〇〇番
電話　編集・〇三—三二三〇—五一三四
業務・〇三—三二三〇—五三三三
販売・〇三—三二三〇—五七二九

印刷・製本——大日本印刷株式会社
用紙——三菱製紙株式会社

＊著者検印は省略いたしました。　＊造本には十分注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。　＊本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

Printed in Japan　ISBN4-09-656009-X
© Mushakōji Saneatsukai 1988

目

次

二宮尊徳……一
自　序……三
二宮尊徳……五
一、清い涙　決心の涙　一　二、かう云ふ智慧もあつた　一　三、心の置きどころ　一　四、彼は真理を求めてゐた　一　五、あいつにや叶はない　一　六、大きな種をまいたのだ　一　七、最初の妻　一　八、この君主あつてこの臣あり　一　九、より大きな孝行　一　一〇、迫害　一　一一、老人夫は泣き出した　一　一二、借りない金を返す　一　一三、一挙両得　一　一四、行方不明　一　一五、之はたゞごとではない　一　一六、便　所　一　一七、先づ無一物になれ　一　一八、事の成否はその人に存す　一　一九、金次郎は怒つた　一　二〇、政治の大道　一　二一、眼中にない名誉不名誉　一　二二、それは間違つた考だ　一　二三、米騒動　一　二四、極悪人から大慈善家に　一　二五、全く死にもの狂ひだ　一　二六、彼の名は海内に響いた　一　二七、相馬藩の大論争　一　二八、実行の勝利　一　二九、印旛沼開鑿工事　一　三〇、富国方法書をつくる　一　三一、野州東郷にゆく　一　三二、彼の誠意遂に代官に通ず　一　三三、最後の奉公　一　三四、彼は人心を知る　一　三五、人心の開墾　一　三六、六十九になつた　一　三七、彼の死　一　三八、終りに
大石良雄……六九
自　序……七一
大石良雄……七三
一　吉良浅野を憎悪した　一　二　珍らしい男　一　三　思ひ知らせてやる　一　四　源五右衛門　一　五　堪　忍　一　六　殿中刃傷　一　七　一番怒つた男　一　八　吉良ほめらる　一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

九　浅野内匠頭に切腹の命令下る　一　十　源五右衛門主君に逢ふ　一　十一　浅野内匠頭切腹の命を受けとる　一　十二　切　腹　一　十三　内匠頭は死んでしまつた　一　十四　大石良雄　一　十五　大石主君の切腹を知る　一　十六　赤穂の武士達の相談　一　十七　三人の相談　一　十八　大石良雄妻と子　一　十九　大石岡島を喚ぶ　一　二十　眠れぬ人々　一　二十一　大石の遠謀　一　二十二　同　一　二十三　籠城の噂　一　二十四　同　一　二十五　片岡磯貝の反対　一　二十六　良雄浪人に逢ふ　一　二十七　籠城の会議の当日（連盟書）　一　二十八　同　一　二十九　同　一　三十　同　一　三十一　お陸と主税　一　三十二　使帰る　一　三十三　開城の会議　一　三十四　開城の相談　一　三十五　大野父子の逃走　一　三十六　お陸主税と散歩す　一　三十七　堀部安兵衛等大石を罵る　一　三十八　大石の病気　一　三十九　大石の妻子　一　四十　山科閑居　一　四十一　同　一　四十二　大石なぐられる　一　四十三　大石の道楽　一　四十四　母と子大石の帰るのを待つ　一　四十五　大石の帰宅　一　四十六　大石の心のなか　一　四十七　時機が近づく　一　四十八　若い連中　一　四十九　山科の集合　一　五十　同　一　五十一　同　一　五十二　同　一　五十三　大石達の堕落　一　五十四　一周忌　一　五十五　同志等又大石を疑ひ出す　一　五十六　大石と竹之丞　一　五十七　死を前に見るもの　一　五十八　大石お軽をひつぱりこんだ　一　五十九　大石味方まであざむく　一　六十　大石ゆるりと腰をあげた　一　六十一　大丈夫が決心したのだ　一　六十二　神文を返す　一　六十三　お軽を返す　一　六十四　大石、三宅多中に牡丹を送る　一　六十五　主税母に逢ひにゆく　一　六十六　母と子の再会　一　六十七　母と子の別れ　一　六十八　大石お軽を訪ねる　一　六十九　大石江戸に来る　一　七十　誓約文　一　七十一　決死の士　一　七十二　良雄と主税　一　七十三　復讐の計画進む　一　七十四　大石の夢　一　七十五　いよ〳〵十四日　一　七十六　とう〳〵時が来た　一　七十七

大石の手紙 一七十八　左六、幸七 一七十九　今日一日 一八十　十四日の朝 一八十一　大石おもむろに云ふ 一八十二　大石等弥兵衛の宅に集る 一八十三　大石安兵衛等の処にゆく 一八十四　大石更に杉野の処にゆく 一八十五　義士集まる 一八十六　吉良家に向ふ 一八十七　いよ〳〵討入り 一八十八　遂に吉良の首をあげる 一八十九　其後 一九十　泉岳寺につく 一九十一　吉良家の人々は 一九十二　泉岳寺にて 一九十三　大石の潔白 一九十四　使を待つ間 一九十五　老中達会議す 一九十六　とう〳〵使来る 一九十七　仙石邸に向ふ 一九十八　仙石邸につく 一九十九　仙石邸における義士達 一百　父子の別れ 一百一　大石達細川家にゆく 一百二　主税の病気 一百三　その年もくれた 一百四　名を惜しむ 一百五　大石等酒をのむ 一百六　その前夜 一百七　切腹の命下る 一百八　大石等の最後の言葉 一百九　大石の切腹 一百十　かくて本当に生き出した

釈迦……一九五

序……一九七
釈迦……一九九
一　釈迦族の生んだ最大人物 一二　釈迦の先祖の話 一三　新しい国の建設 一四　浄飯王と摩耶夫人 一五　誕生 一六　阿斯陀仙人の予言 一七　摩耶夫人の死 一八　不思議の子 一九　最も美しい特色 一一〇　虫の死を憐れむ 一一一　耶輸陀羅姫 一一二　結婚 一一三　太子の煩悶 一一四　出家の願 一一五　太子と耶輸陀羅妃の会話 一一六　太子、老人に出逢ふ 一一七　羅睺羅の誕生 一一八　太子、出家の意志を父王に語る 一一九　王様の嘆 一一〇　太子の出家 一一一　七日間の森

林中の静坐と始めての乞食　一　二二　跋伽婆仙人を訪ふ　一　二三　王舎城にて頻毘娑羅に逢ふ　一　二四　阿羅邏迦羅摩の弟子になる　一　二五　父浄飯王よりの使　一　二六　阿羅邏迦羅摩の下を去る　一　二七　尼連禅河の辺での修行　一　二八　苦行　一　二九　苦行をやめる　一　三〇　仏陀となる　一　三一　仏陀の自覚　一　三二　五人の弟子　一　三三　耶舎及び六十一人の弟子　一　三四　三十人の男　一　三五　迦葉の三人兄弟の改宗　一　三六　再び頻毘婆羅王に逢ふ　一　三七　王、竹林精舎を造立す　一　三八　舎利弗と目犍連の二大弟子加はる　一　三九　人々、仏陀の為に出家する者多きを非難す　一　四〇　長爪梵志との問答　一　四一　大迦葉来たる　一　四二　名医者婆の願　一　四三　夜中須達長者、仏陀に逢ふ　一　四四　須達長者、祇園精舎を建立　一　四五　波斯匿王、仏陀を訪ふ　一　四六　浄飯王、仏陀に使を送る　一　四七　優陀夷、仏陀に逢ふ　一　四八　仏陀、迦毘羅城に帰る　一　四九　耶輸陀羅妃　一　五〇　仏陀と耶輸陀羅妃の対面　一　五一　仏陀、父王に説法す　一　五二　王の心配と諸王子の出家　一　五三　優婆離の出家と諸王子　一　五四　残れる人達　一　五五　跋提の楽しみ　一　五六　浄飯王の死　一　五七　摩訶波闍波提等五百人の女の出家　一　五八　若き僧の質問　一　五九　婆羅門種の二人の弟子　一　六〇　仏弟子同志の争　一　六一　三人の出家王子の美しき生活　一　六二　須提那の破戒　一　六三　達尼迦の破戒　一　六四　優陀延王と賓頭盧　一　六五　羅睺羅と毒蛇　一　六六　羅睺羅なぐられる　一　六七　毘舎佉の布施　一　六八　玉耶の改心　附けたり婦道　一　六九　仏陀と調馬師　一　七〇　糞尿をあびた尼提の出家　一　七一　大愚槃特の悟　一　七二　阿那律、肉眼を失つて天眼を得る　一　七三　聞二百億の琴の譬　一　七四　阿難と若き旃陀利の女　一　七五　鬼子母の改心　一　七六　迦留陀夷よく叱られる　一　七七　迦留陀夷、偸蘭難陀比丘尼をなぐる　一　七八　迦留陀夷の死　一　七九　優波先那の美しき死　一　八

○ 悪い牛乳と善き牛乳 一八一　舎利弗 一八二　舎利弗訴へらる 一八三　蓮華色女、目犍連を誘惑せんとす 一八四　鴦崛摩羅百人の人を殺さんとす 一八五　大迦葉の修道 一八六　受けとられぬ罵詈 一八七　羅睺羅、遂に悟る 一八八　富楼那の決心 一八九　其の後の耶輸陀羅 一九〇　阿難、侍者となる 一九一　提婆達多 一九二　提婆、仏陀を殺さんとす 一九三　提婆、阿闍世太子に父王を弑する事をすゝむ 一九四　獄中の頻毘婆羅王 一九五　提婆、仏陀を僧団から退けんとす 一九六　提婆、仏陀の勢力を奪はんとす 一九七　阿闍世王、仏陀に懺悔す　提婆の滅亡 一九八　琉璃太子、王位を僭し釈迦族を恨む 一九九　琉璃王、釈迦族を亡ぼす 二〇〇　仏教の隆盛を憎むもの、大目連を殺す 二〇一　舎利弗、涅槃に入るために仏陀に別をつげる 二〇二　舎利弗の死 二〇三　仏陀、戦争を未然にふせぎ、比丘に不退法を説く 二〇四　仏陀、涅槃の近きを知つていろ〳〵説法される 二〇五　越祇国から毘舎離国に入る 二〇六　菴婆婆利と離車族 二〇七　仏陀疾む 二〇八　淳陀と旃檀茸 二〇九　仏陀、涅槃の地へと苦しい旅をつゞける 二一〇　力士達、仏陀に詣づ 二一一　最後の弟子 二一二　仏陀、阿難を慰む 二一三　仏陀、後のことを心配し給ふ 二一四　羅睺羅来たる 二一五　最後の説法 二一六　仏陀、涅槃に入り給ふ 二一七　最後に

後　書……二三四

釈迦の伝記書かうとして……二三六

日本の偉れた人々……二三九

序……三四一

〔伝記・小説〕

親鸞の結婚……三四一
日蓮と千日尼……三五〇
黒田如水……三五九
宮本武蔵……三六八
白　隠……三七八
頼山陽と川上儀左衛門……三八四
黒住宗忠……三八八

〔感想・人物評論〕

空海に就いて……三九七
柳里恭に就いて……四〇四
宮本武蔵の一面……四〇六
自分の好きな日本画家三四……四一五
黒住宗忠に就いて……四一七
　黒住宗忠のこと　一　黒住宗忠のことなど
法然のことを一寸……四二三
一休和尚に就いて……四二五
西郷隆盛と二宮尊徳の挿話……四三一
　西郷隆盛と二宮尊徳　一　前文西郷の話の訂正

二宮尊徳に就いて……四三四
二宮尊徳の仕事の一つ　一　二宮尊徳に就いて　一　二宮尊徳　一　二宮尊徳の言葉　一　『二宮翁夜話』から　一　二宮尊徳の言葉をよんで
北斎雑感……四五八
雪舟に就いて……四六一
楠正成一巻書……四六二
三条実美公……四六四

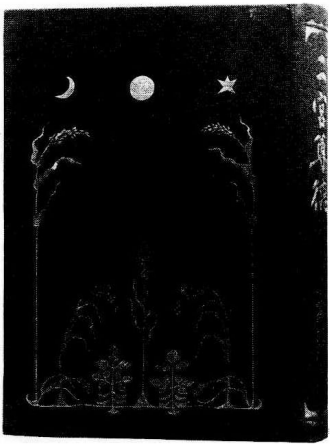
幸田露伴……四七一

序……四七三
露伴の一面……四七四
露伴の小説について……四七七
幻談　一　雪たたき　一　連環記　一　対髑髏と風流魔　一　風流仏と五重塔　一　風流微塵蔵　一　天うつ浪　一　土偶木偶
露伴翁家語を読んで……四九七
一、大博識露伴　一　二、露伴先生自伝補註
露伴との対談記……五〇二
幸田露伴先生を訪ふ
露伴に関する雑録……五〇七
露伴翁に敬意を表して　一　国宝的な露伴—人物素描—　一　露伴の死を聞いて　一　講演二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

章一　口絵の字について
「大調和」前後（二）……五一五
「大調和」……五一七
「発刊の辞」（昭和二年四月号）～「三段雑記」（昭和三年十月号）
「独立人」……五六七
「感　想」（昭和三年十一月創刊号）～「三段雑記」（昭和五年六月号）
「星　雲」……六六八
「三段雑記」（昭和六年一月号）～「三段雑記」（昭和六年九月号）
「重　光」……六九一
「雑　感」（昭和七年十一月号）～「重光を休刊するに際して」（昭和九年十月号）
解説・解題……大津山国夫……七四七

二宮尊徳



〔『二宮尊徳』表紙。装幀：尾竹竹坡〕

自序

二宮尊徳はどんな人か。

かう聞かれて、尊徳のことをまるで知らない人が日本人にあつたら、日本人の耻だと思ふ。それ以上、世界の人が二宮尊徳の名をまだ十分に知らないのは、我等の耻だと思ふ。

僕は世界中の人が二宮尊徳と云ふ人が日本に生れて居たと云ふことを知らないのは世界にとつての損失だと思つてゐる。

ワシントン、リンコルン位に世界的に有名になつていゝ人と思ふ。幕末の人間の内、僕は二宮尊徳が一番大人物だつたと思つてゐる。西郷隆盛が二宮尊徳の教をきいて実に感心したさうだが、その話をきいた時、隆盛は矢張りいゝ処があると思つた。

二宮尊徳から生きた教訓を受けて立派な人間になつた人は日本には存外多いのだ。さう云ふ人達のことを調べたら面白いと思ふ。

しかし多くの人は尊徳のことをあまりに知らなすぎる。

それは実に惜しいことだと思ふ。

さう云ふ僕も尊徳のことをいく分知つたのは最近のことである。知る機会がありさうでないのだ。何となく親しめないのだ。それが僕にこの本をかゝした一番の理由である。

尊徳の本がないのではない、ありすぎる位なのだが、その道に入らないと、読む気になれない本が多い。気軽に手ごろに尊徳のことを知る本が少ない。

さう云ふ意味で僕の本は今迄尊徳のことを読まず嫌ひになつてゐた人々に尊徳を近づけることが出来ると思ふ。其処にこの本の存在理由がある。

自分はこの本をなるべくよみよくかいた、ある処小説風にかかうとしたが、しかしこの大人物をあやまりつたへるのがいやで、なるべく事実により、想像は加へなかつた。この本は面白く読ませたいと思つてかいたのではあるが、それより尊徳の人となりや、精神を一人でも多くの人に知らせたくつてかいた。

尊徳のやうに真剣に、考へ又生きた人は珍らしい。彼は人道と天道のことを実によく知り、人間の如何に生くべきかを根本的に知つてゐる。彼のやうに一生、目的に向つて努力しつくした人は少ないであらう。実によく働きぬいた。

又彼程、自分の利害から超越して、人々の生命のために働いた人は少ないであらう。彼は捨身になつて人々を助けた。それだけ彼は人々を甘やかさなかつた。

彼は実に労苦し、そしてそれに打ちかつた。だから彼は労苦をいとふものには、自分の道を説くのをいやがつた。彼は本当に道を求める人にのみ道をといた。その求め方の真剣なもの程、彼から得るものが多かつた。

彼は人々に裸一貫になつて立ち上る決心をすゝめた。虫のいゝ考へを起さず、人道を行ふことをすゝめた。

彼の人道についての考は又実に彼らしかつた。人間の生きるために必要なことは彼には皆人道に見えた。そして農夫だつた彼は実によく人間は働かなければ食へないことを知つてゐた。そして又その働き方をよく心得てゐた。

彼は又天理を実によく知り、それを尊敬して、無理を云はなかつた。彼は又実に至誠がよく人を動かすことを知つてゐた。彼が人を動かす力は至誠による。

しかし彼は又よく人心を知つてゐた。彼は人間をあまく見てゐな

い。彼は彼の仕事を邪魔するいろ〳〵の人と実に根気よく戦ふ必要があつた。そして彼は遂にそれ等の人を動かした。

彼がよくものを知り、いろ〳〵のことに出あふたびに彼の本性をあらはす、その本性が実にしつかりしてゐて、真理に忠実なのに我等はおどろかされる。

彼のやうな心がけで生きぬけたら大したことが出来るのは当然である。

彼は実に、何万と云ふ人を餓ゑからすくひ又破産からすくつてゐる。彼は目に見えない処で、実に多くの人を救つてゐるであらうが、直接手をおろしても何万と云ふ人が死ぬ処を助けてゐる。トルストイが彼のことを知つたら随分感心したらうと思ふ。

彼は実に多くの生命のために働き、之を救つた。彼は自分の家の富むことなぞまるで考へず、人間全体が富むことを考へ、人類全体が安楽にくらせる道を考へてゐた。

彼の実行しようと思つたことが実行されてゐたら、日本は世界で一番立派な安穏な国になつてゐたであらう。しかし彼のやうな心がけで一生をぶつ通して生きられる人は実に少ないと思ふ。しかし彼の伝記を読むことで我等の心は清められ、決心はあらたにされ、本気になつて生きたくなることは事実と思ふ。

僕のこの本を通して、彼の人格、彼の心、彼の努力、精神がいく分でも人々の心にふれることが出来たら実によろこびである。

そのよろこびは又大勢のよろこびになるであらう。

自分は何処かの片田舎でこの本をよむ若い人々のことを考へる。そしてそれ等の人が決心を新にして、第二、第三の二宮尊徳になつてやらうと覚悟をきめることを想像する。

それは自分にとつて最もうれしい想像である。この本よ、幸ひであれ。

昭和五年十一月八日

二宮尊徳

一、清い涙　決心の涙

金次郎は夜中にふと目をさました。すると又母のすゝり泣く声が聞えた。彼は母が一人で私かに泣いてゐるのに、気がついたことを知られるのがいやで、黙つて寝たふりしてゐたが、母のしのび泣く声をきいてはもう我慢が出来なくなつた。

『お母さん。なにを、ないていらつしやるの』

十四歳の金次郎にさう云はれると、お母さんもつい本当のことを云はないではゐられない気がした。

『富次郎のことがつい思ひ出されるのだよ。今時分泣いてはしないかつてね。乳がはつてくるたびに富次郎のことが思ひ出されて、ついかなしくなるのだよ』

さう云はれると金次郎も、涙が出かけて困つた。

金次郎には二人の弟があつた。十一歳の三郎左衛門と、二歳の富次郎と。そして父がなくなつた時、母の手一つで三人の子は養へないと言ふので、末子の富次郎だけ十四町程はなれた縁者の処へあづけてあつたのだ。

『お母さん』

金次郎は決心したやうに云つた。

『富次郎をつれて帰つていらつしたらいゝぢやありませんか。赤坊が一人位ゐたつて、どうにかなりますよ。僕達が本気になつて働けば』

『それでもね』

『お母さん可哀さうぢやありませんか。つれて帰つていらつしやい。そして皆で元気に働きませう。赤坊一人位どうだつてなるぢやありませんか。本当につれていらつしやい』

『それぢやつれて帰るかね』

『それがよろしい。さうおしなさい』

子供ではあるが、金次郎を唯一のたよりにしてゐる母は、かう金次郎に云はれると、急に元気になつた。

そして起き上つて着物を着かへだした。

『お母さん、朝になつてからおいでになつたらいゝぢやありませんか。今子の刻ですよ』

『つれて帰るとなると、もう一刻も辛抱が出来ないよ。月もいゝから一寸いつてくるよ』

『だつて随分ありますよ』

『富次郎をつれて帰るためならね』

金次郎も起きた。そして母をおくり出すと、金次郎は泣き出した。しかしそれは悲しくではない。決心したのだ。

金次郎はその前からよく働くので皆をおどろかしてゐた。彼は父が病気の時、責任を感じて実によく働いた。彼は十二の時、酒勾川（さかわがは）の土手をなほすため、一戸から一人づつ出て働かなければならなかつた。彼の家では十二の彼より他に出て働く者はなかつた。彼は出て一心に働いたが、とても大人と一緒に働くことは出来なかつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com